

Marine Turtler

マリンタートラー

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第24号





表紙の絵

谷本 楓牙(タニモト フウガ)くん

今号の表紙の絵は、高知県室戸市元小学校2年生の谷本くんのイラストです。当会の室戸調査基地では、毎年元小学校に出前授業にいらしています。その際に、このイラストを描いて頂きました。竜宮城へ行く浦島太郎とウミガメをカニさんが通せんぼする構図になっています。詳しくは11ページをご覧ください。

表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

サイズ:B5

色:仕上がりはモノクロになります。

期限:×切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。

応募方法:大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。

送付先:〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

日本ウミガメ協議会 マリントートルー編集部

メールの場合は info@umigame.org まで

件名に「マリントートルー表紙」と明記の上お送り下さい。

会報の名称マリントートルー(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。

つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きな人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリントートルーと呼ぶことを提唱したいと思います。

 Marine
Turtler

Contents

ウミガメ基礎講座 24 「あなたはだ～れ？」 岡本 慶 ——— 3P

ウミガメの民俗15 紀州田辺のウミガメ漁 藤井 弘章 ————— 5P

大阪事務局より 松宮 賢佑 ————— 8P

各地からの報告

魚釣りで死んでしまったウミガメの話し 北山 知代 ————— 9P

子どもたちの学びと発想に感動 田中 優衣 ————— 11P

社会貢献者表彰を受賞 若月 元樹 ————— 12P

亀レースのご報告と紀宝町ウミガメ総選挙のお知らせ 岡崎 鮎美 ————— 13P

実習報告

黒島研究所での学芸員実習を終えて 三重大学 平井 航大 ————— 14P

出張報告

澎湖諸島のウミガメ会議 亀田 和成 ————— 15P

STSmembers募集中、ご寄付を頂いた方々 & 編集後記

「あなたはだ～れ？」

国立研究開発法人水産研究・教育機構 国際水産資源研究所 岡本 慶

2017年もういよいよ年の瀬が近付いてきた。ふと来年の干支は何かなと子、丑、寅・・・と指折り数え、「戌」にたどり着いた。十二支の戌とは少し異なるかもしれないが、街を歩けば、チワワ、ダックスフント、柴犬など様々な犬を見かける。そんな中にはチワックスなるものが存在し、言われてみれば、確かにチワワとダックスフントの特徴を併せ持っている。とはいえ、これらはすべて生物学的に言えば「イヌ」という一つの種なのである。

では、ライガー、レオポン、タイゴンという名前を聞いたことがあるだろうか。どこかのプロレスラーのような名前であるが、これらはみなネコ科動物の種間交雑個体の俗称である。それぞれ順に、ライガーはオスのライオンとメスのトラ(タイガー)、レオポンはオスのヒョウ(レパード)とメスのライオン、タイゴンはオスのトラとメスのライオンが交雑して生まれた動物である。ライオン、トラ、ヒョウは別の種なので、種の壁を越えて繁殖し生まれたものである。

ウミガメの世界でも種間交雑が起きている。その組み合わせは多岐にわたり、アカウミガメとアオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメの各種、アオウミガメとタイマイ、ヒメウミガメ、ヒラタウミガメ、タイマイとヒメウミガメ、ケンプヒメウミガメとアカウミガメといったように、進化的にも形態的にも大きく異なるオサガメを除く全ての種でいずれかの他の種との交雑が確認されている。交雑個体の中には、両種の特徴を併せ持っていて、見たことのない外見的特徴を持つウミガメに、戸惑いすら覚えることがある。

このようなウミガメの種間交雑が初めて報告されたのは、今から約80年前の1940年までさかのぼる。カリブ海に浮かぶケイマン諸島から記録されたタイマイとアカウミガメの交雑個体であったが、現地の漁業者は以前からオスのタイマイとメスのアカウミ

ガメが交尾しているのを見ていたそうである。このような交雑個体は、現在では限られた場所だけでなく、日本をはじめ、ブラジル、米国、カナダ、メキシコ、イタリア、オーストラリアなど世界各地から報告されている。

普通なら、種間交雑というのは、交尾に至る割合が低かったり、受精率が低かったり、生まれる子ガメのふ化率が低かったり、形態的に異常が認められたり、と生き残るのに不利な状況が生じる。雑種個体が極力生まれないようにしながら、もし生まれてしまっても淘汰されることで、雑種だらけにならないようにする。ところが、そんな常識を覆す事態が、ブラジルで起きている。ブラジル・バヒア州の海岸では、産卵に訪れたタイマイの4割もの個体がアカウミガメの遺伝子を持っていたと報告され、文字通り、雑種だらけになっている。広い海で繁殖相手に出会い、砂浜で産卵しなければならない彼らにとって、同種かどうかよりも、自分の遺伝子を残すことが最も重要だったのかもしれない。オスの交尾は曖昧なもので、繁殖期のオスのアカウミガメがダイバーに対して交尾をしようとしてきた記録すらある。ウミガメの種類が分かれているのは、交尾の時期や場所、体サイズなどの物理的な障壁を種間の壁としていて、もし、それが破られたときには雑種だらけになってしまうのかもしれない。

こうした雑種をどう扱うべきか、という点が議論になるところだろう。自然な現象なら、そのままにしておくべきだろうし、人間が引き越してしまったことなら、そのままにしておくのは良くないかもしれない。先に述べたブラジルの例では、ここ30年以内で両種の個体数が大きく減少したことによって大半の雑種が形成されたと言われている。

新たな種が生まれる過程と考える人もいるが、個体数の減少や雑種形成の誘発には何らかの形で人間活動も関わっているかもしれない。文頭のチワックスのように我々の目に見える範囲ではなく、自然の中という一端しか垣間みえない状況で起きている問題は、今後しっかりと考えていかなければならないことの一つと言えるだろう。

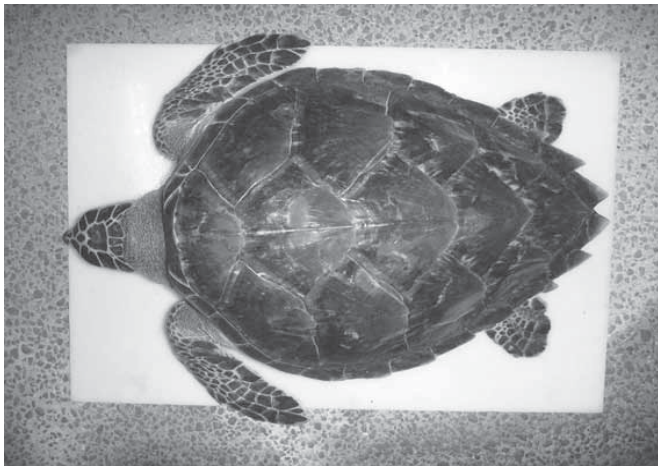


図1. 日本で発見されたアカウミガメとタイマイの交雑個体。甲らの後ろがギザギザしており、タイマイの特徴がある。頭部はタイマイより相対的に大きく、アカウミガメの特徴が表れている。



図2. 上顎の先端は尖ってるのはタイマイの特徴である。



図3. 通常、下顎の鱗はタイマイは1枚、アカウミガメは複数ある。このため、アカウミガメの特徴が表れている。

紀州田辺のウミガメ漁 江戸から昭和時代にかけての変化

近畿大学文芸学部 教授 藤井 弘章

昭和中期ごろまでは、日本各地にウミガメを捕獲し、食用とする習俗がありました。ただし、積極的に捕獲して販売する地域と、たまに捕獲して自家消費的に利用する地域がありました。今回は、積極的にウミガメ漁をおこなっていた紀州田辺(現在の和歌山県田辺市)の事例を紹介してみましよう。ただし、そんな田辺でも時代によって、積極的に利用していた時期と、自家消費的に利用していた時期があるようです。もちろん、現在では捕獲習俗も食用習俗も残っていません。江戸時代の古文書、明治～昭和時代の文献、現地での聞き取り調査から、紀州田辺のウミガメ漁の変化をたどってみます。この内容は、藤井弘章「紀伊半島南部におけるウミガメ漁とその食習俗」『日本民俗学』215(1998年)に詳しくまとめています。なお、田辺市教育委員会発行の『田辺市文化財』51(2015年)、同52(2016年)にも同じ論文が分割して紹介されました。

江戸時代後期から明治時代にかけて、紀州田辺ではウミガメ漁が盛んにおこなわれていました。この時期には、田辺周辺ではウミガメ肉は産物として流通していたようです。紀州の産物をまとめた、文政8年(1825)成立とされる『十寸穂の薄』(ますほのすすき)には、田辺を中心とする牟婁郡口熊野の産物として「亀肉」があげられています。ここには、田辺の江川の漁師がウミガメを捕っていた、と書かれています。『十寸穂の薄』には日高郡まで「亀肉」が販売されていたとあります。また、嘉永元年(1848)に完成したと思われる『熊野物産初志』にも、「田辺ニテ漁人冬月此ヲ捕其肉ヲ売 カメクジラ ト呼」と書かれています。

しかし、理由ははっきりしませんが、幕末になるとウミガメ漁は禁止されるようになります。江戸時代の田辺は、紀州徳川家の付家老・安藤氏の領地で、

紀州本藩とは異なる統治がされていました。田辺領では、安藤氏の命令でウミガメ漁が禁じられるようになったと思われませんが、同じ紀州でも田辺以外ではこの法令は適用されていません。田辺では、とくに幕末の嘉永・安政期(1848～60)ごろに集中して「亀漁」および「亀売買」が取り締まられました。田辺に残されている『町大帳』、『御用留』という古文書には、「亀漁」・「亀売買」の取り締まりに関する事例が何件も書き残されています。そこからは、当時の田辺でおこなわれていたウミガメ漁の様子がかがうことができます。

田辺でウミガメ漁がおこなわれていたのは江川という漁師町でした。江川は戦国時代に成立したと考えられる古い漁村です。春夏はカツオ釣り漁、その間にサバ釣り、秋から冬には船で網漁をしていました。漁業組織も整っていました。こうした歴史的に古くから存在する江川という漁村で、江戸時代後期に大規模で組織的にウミガメ漁がおこなわれていたようです。

紀州田辺におけるウミガメの捕獲方法には、①上陸したウミガメを浜で捕獲する、②船上から鉬で突いて捕獲する、③船上から釣りで捕獲する、という3つがあったようです。①の方法は当時の文書には「亀拾」、「亀取」と書かれています。南部(みなべ町)の千里浜まで出かけてウミガメを捕獲する者もいました。こうした捕獲方法は、昭和初期までは南西諸島を中心におこなわれていました。南西諸島ではアカウミガメ・アオウミガメが対象ですが、紀伊半島ですからアカウミガメが対象だったと思われます。②の方法は「亀突」と記されています。この方法は、昭和初期までは九州・四国・紀伊半島・伊豆諸島においてアカウミガメを捕るときにおこなわれていました。5月・6月ごろ、産卵のために沿岸に近づいたアカウミガメを、船上から鉬で突くのです。

江戸から明治における田辺のウミガメ漁は、③の方法が一般的であったようです。これは、次のようにして捕獲しました。真鍮製の天秤の中央に綱を結び、天秤の両端に各々3尺ほどの糸を付け、糸にイカを装した鉤を付ける。天秤の下には80匁ほどの鉛錘がある。カメが来て餌にかかるのを計って綱を引いて鉤にかからせる。餌にはスルメイカを用いる。明治時代の『大日本水産会報』113号・176号には、このような田辺のウミガメ漁の方法が詳細に記されています。

このような釣りによるウミガメ捕獲は、昭和初期におこなわれていた全国のウミガメ捕獲の民俗事例と比較すると珍しいものです。唯一、聞き取り調査で釣りによるウミガメ漁が確認できたのは鹿児島県の種子島です。種子島の場合も、冬場にイカを餌としてウミガメを釣っていました。種子島でも明治時代にはこの方法でウミガメを捕っていたようです。種子島の場合は、昭和時代までこの方法のウミガメ漁がおこなわれていました。冬場に釣りで捕るのはアオウミガメであったようです。そして、捕ったアオウミガメの肉は、西之表の中心部で正月の魚として販売されていました。種子島ではウミガメのことをカメノイオ(亀の魚)と呼んでおり、魚類の一種と考えていました。

紀州田辺と種子島、どちらのほうが釣りによるウミガメ漁は古いのでしょうか。今のところはよく分かりません。紀州と種子島は、熊野信仰(紀州から種子島)や鉄砲伝来(種子島から紀州)のつながりもあることから、古くから人々が行き来していたことは間違いありません。そうした交流のなかで、釣りによるアオウミガメ漁もどちらかから伝わった可能性があります。

江戸から明治の紀州田辺におけるウミガメ漁をまとめると、次の2つのタイプに分かれるようです。A

は春から夏にかけて産卵のために沿岸にやってくるアカウミガメを狙ったものです。これは、①と②の方法で捕獲しました。Bは冬に釣りでアオウミガメを捕獲するもの。これは③の方法で捕獲しました。江戸から明治にかけては、Bの冬にアオウミガメを捕ることのほうが、販売を目的とした大規模で組織化された漁業であったと思われます。一方、Aのほうは、漁師の自家消費と小遣い稼ぎ目的であったようです。

田辺のウミガメ漁は、幕末に取り締まられますが、なくなることはありませんでした。それは、田辺や周辺の人々の間でウミガメ肉の需要があったからようです。そして明治時代になると、『大日本水産会報』などで、全国的に紀州田辺のウミガメ漁は紹介され、むしろ水産物として捕獲が推奨されるようになります。ところが、明治時代末期から大正時代にかけて、田辺のウミガメ漁は衰退していきました。田辺周辺で、ウミガメを食べると祟りがある、という考えが広まったからのものでした。

ただし、大正時代に田辺のウミガメ漁は完全に消滅したわけではありませんでした。その後も、昭和中期まではウミガメ漁は残ります。この時期のウミガメ漁は、船上から銚でアカウミガメを突き捕るものでした。昭和時代には販売目的ではなく、自家消費的な目的でおこなわれました。つまり、前にまとめたようなBのタイプがなくなり、Aのタイプが残ったといえます。大正・昭和初期生まれの江川の漁師の方に話をうかがうと、ウミガメはカツオ漁に出ているときに銚で突いて捕ったが、自分たちで食べるだけで売ってはなかった、と語ります。「カメを見つけたら捕らんことには漁せん。逃がしたら漁せん。突きそこなうようだったらやめておけという。」ともいいます。つまり、この時期のウミガメ漁はカツオを捕るための縁起担ぎでもあったようです。

また、昭和中期までは、漁村では肉を買うことはほとんどなく、目の前の海で手に入るウミガメなどの肉はとても貴重な食糧だったのです。

さらに、串本や新宮などの漁師によると、ウミガメを銚で突き捕ること自体が楽しかったようです。昭和中期までは娯楽が少ない時代でしたから、カツオ漁などの本業以外にウミガメを銚で突き捕るという行為そのものが娯楽だったようです。人類学・民俗学では、このような楽しみとしての労働のことを、マイナーサブシステムと呼んでいます。経済性はあまりないが、とても熱心に楽しみとしておこなっている生業のことです。和歌山県では養蜂、アユ漁などもマイナーサブシステムといえます。田辺のウミガメ漁の場合は、昭和中期(1960～70年代)に急速に衰退しました。それは、ウミガメ自体の減少、自然環境の悪化、自然保護思想の高まり、といった理由の前に、田辺周辺においても牛肉・豚肉・鶏肉などが流通したという理由もあったと考えられます。また、若者の嗜好が変化したことも影響しています。とくにアカウミガメは臭みがありますが、和歌山県南部の大正・昭和初期生まれの方々は、その臭みがうまい、といいます。しかし、漁師の息子でも昭和20年以降の生まれぐらいの方になると、ウミガメはおいしくない、という人が多くなります。そのほか、江戸時代のウミガメを捕ってはいけないとする法令、仏教の影響、明治時代のウミガメの崇りの言説、都市住民によるウミガメ食の忌避なども影響を与えたと思われます。このように、紀州田辺のウミガメ漁といっても、一概には説明できません。時代によって捕獲方法、捕獲種、捕獲目的などは変化しました。最後まで残ったのが縁起担ぎの楽しみとしてのウミガメ突きであったといえます。

● 活動報告

今年の夏、事務局では大阪府枚方市内の小学校にある学童保育（留守家庭児童会）で、夏休み中のプログラムとしてウミガメをはじめとした海の生き物についてのレクチャーを行いました。今年が初めての実施となりましたが、3ヶ所からの依頼をいただき、それぞれ1時間ずつ行いました。

さすがにウミガメを連れていくことはできませんでしたが、パネルや標本を見てもらいながら解説を行い、生き物クイズやゲームでは子どもたちが自分で考えて元気に答える姿がとても印象的でした。どの学校でも、子どもだけでなく先生からの質問や驚きの声があり、あっという間の1時間でした。

事務局のある枚方市から海は見えませんが、参加した子どもたちが少しでも海に思いを馳せる時間を作ることができました。



● 日本ウミガメ会議、国際ウミガメシンポジウムの参加申込み受け付け中です！

前号や当会のホームページでもご案内していますが、次回の日本ウミガメ会議は第38回国際ウミガメシンポジウムとの同時開催となります。

既に早割での申込み受付期間は終了となりましたが、まだまだ参加申込みの受付は行っております。1日のみのご参加も可能ですので、参加を検討しているけどいつ参加しようかとお考えの方は、ぜひ事務局までお問い合わせください。

魚釣りで死んでしまったウミガメの話し

エバーラスティング・ネイチャー小笠原事業所（小笠原海洋センター） 北山 知代

「あれ？もしかしてコマセじゃない？」

地元の漁師さんに、死んだウミガメが海に浮いているとの情報をもらい現場に向かうと、そこには変わり果てたコマセの姿があった。

はじめてコマセと出会ったのは2016年9月27日。父島二見湾青灯台において、釣り人によって釣り上げられた。よくよく見てみると、なんと右の後足に標識がついているではないか。調べてみると、2012年に小笠原諸島母島で産まれた後、和歌山県のすさみ町立エビとカニの水族館で飼育され、2016年5月に父島大村海岸から放流された小笠原産のアオウミガメであるということが判明した。放流された後も外洋へは行かず、父島の沿岸で過ごしていたらしい。「今度は釣りの餌にひっかかるなよ。」と願いを込めて、4日後に父島製氷海岸から放流した。それから約1年後、私たちは再びコマセと出会うことになる。

2017年9月16日、コマセは再び二見湾青灯台において釣り人に釣り上げられた。なんということでしょう。またしても、同じ場所で、まんまとコマセに引っ掛かったのだ。こいつ、学習してないぞ…。ちなみに、もうお気づきかもしれないが、「コマセ」という名前の由来はコマセ（まき餌）釣りからきている。（実は「ひでお」という正式名があるのだが、あまりにも「コマセ」のインパクトが強かったので、私たちは「コマセ」と呼んでいた。）前回同様、幸いにも衰弱や外傷は見られず、3日後に外洋に近い父島宮の浜海岸から放流した。

「二度あることは三度ある」ということわざがあるが、どうやらコマセにも三度目があったらしい。しかし、私たちが三度目にみたコマセの姿は前の2回とは異なるかわいそうなものであった。ここで冒頭に戻る。

2度目の放流から約2か月後の2017年11月18日。漁港で浮いているコマセが見つかった。体がガスによりパンパンにふくらんで、死んでから数日ほど経過していると思われた。首のあたりと右の前足に釣り針が引っかかっていた。

「もしかして…？」

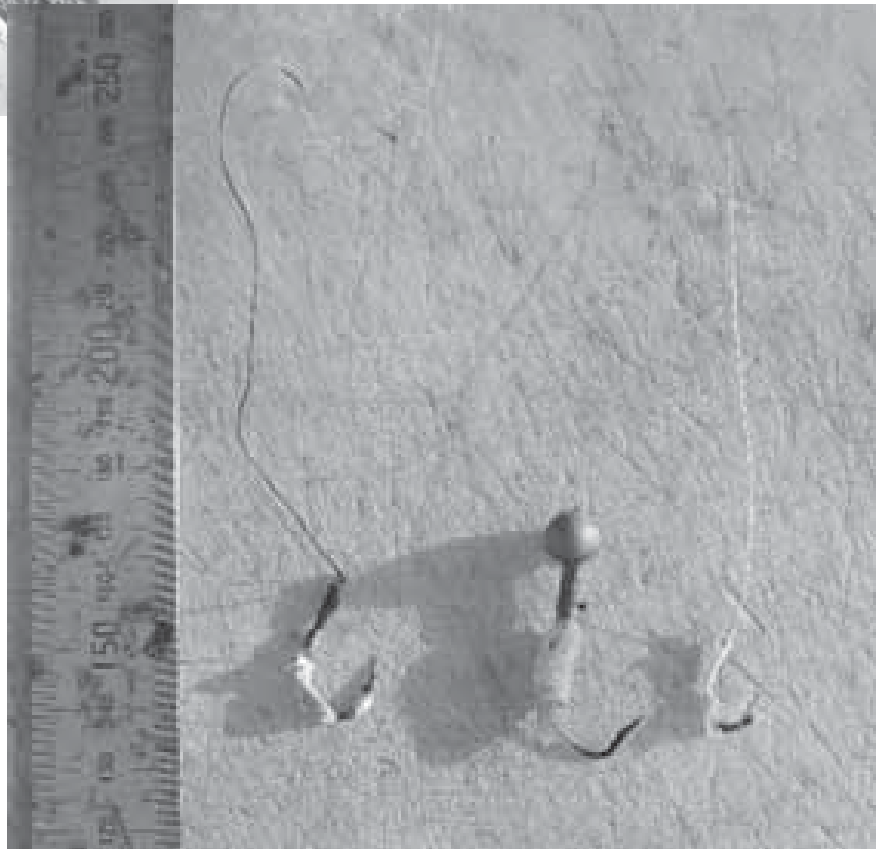
死因を調べるため、その日のうちに解剖を行った。その結果、口の中に1本、喉に1本の計2本の釣り針が見つかった。喉の釣り針は、なんと気管も突き刺していた。過去に二度も釣り上げられたコマセのことである。この状態に至った経緯は想像しやすい。

果たして「釣り針に引っ掛かったコマセ」の自業自得なのであろうか？
はたまた「ウミガメがいると知って釣りをしていた人」が悪いのであろうか？
たかが1頭死んだくらい、気にすることはないのであろうか？

今回のコマセの一件は私たちに大きな疑問を投げかけていった。



放流前のコマセ
綺麗なアオウミガメであった。



死んだコマセから
取り出した釣り針

地元の子どもたちの学びと発想に感動

室戸基地 田中 優衣

地元の元小学校で、恒例の出前授業をおこなってきました！室戸はアカウミガメの産卵地で、しかも、岬の周辺に設置された定置網にはウミガメが混獲されます。そのため、室戸基地では、地元の子どもたちにウミガメに関心をもってもらうため、出前授業をおこなっています。小学1・2年生を対象として、ウミガメの種類の見分け方、ウミガメと陸ガメの違いなどを説明しています。私はこの出前授業を担当して2年目です。今年は、新たに加わった一年生1名と昨年授業を受けた二年生2名の3名の先生になってきました。

授業では、最初に『室戸の砂浜にはウミガメが上陸し産卵します』と説明した後、『では、室戸に何の種類のウミガメが産卵しに来るでしょうか？』とクイズを出そうとしました。そうすると、クイズの前に「アカウミガメがくるんだよね！アカウミガメでしょ！」と、二年生のある児童が言いました。私は去年の内容をあまり覚えていないだろうなと思っていましたが、ちゃんと忘れずにいたのです。次に『孵化したアカウミガメは砂の中から脱出して海へと向かうんだよ』と説明すると、「そして、カリフォルニアのほうにいくんだよね！」とまた二年生が言いました。今までウミガメの回遊について触れたことがなかったので少し驚きました。おそらくは自分で学習したのでしょう。最後に、ウミガメのお絵かきをしました。プリントには浦島太郎と竜宮城の絵が印刷されており、そこにウミガメを描いてもらいました。『時間があれば他にも生き物を加えていいですよ』と伝えると、カニを描いている生徒がいました。『おお！カニさんもいるんだね』『そうだよ。この2匹のカニさんが竜宮城に行くのを邪魔しているんだけど、アカウミガメはカニを食べれるから、むしゃむしゃ食べて、浦島太郎と竜宮城にいくんだ！』私は本当に驚きました。低学年が描いた可愛らしいイラストに、食う・食われるの関係、食物連鎖が含まれていること。

小学生の子どもたちの学習意欲と発想にびっくりするとともに、この出前授業がウミガメへの興味を引き起こすきっかけになったと実感できてとても嬉しかったです。きっと、いろんな考えをもてる大人に成長してくれると思います。私も勉強してより関心を持ってもらえるように授業を工夫していこうと思います。



浦島太郎の物語をスケッチする小学生

社会貢献者表彰を受賞

黒島研究所 若月 元樹

黒島研究所で開催している『うみがめ勉強会』は、離島振興と持続的なウミガメ調査を実現したとりくみとして、公益財団法人社会貢献支援財団（会長 安倍昭恵 様、総理大臣婦人）より第 49 回社会貢献者表彰を受賞しました。

うみがめ勉強会は、2011 年の東日本大震災の影響で減少した観光客と伝統的なウミガメ漁の衰退問題を解決しようとして始めました。当時は、当研究所だけで実施しており、職員わずか 2 名の小さな研究所にとっては金銭的にも人材的にも大きな負担でした。ここまで継続できたのは、早稲田大学と株式会社ブリヂストン社の W-BRIDGE プロジェクトを始め、沖縄しまて協会の NPO 支援事業、公益財団法人 前川報恩会の地域振興助成、那覇青果社会貢献基金、大成建設歴史・自然環境基金のご支援のお蔭です。現在では、当研究所だけではなく、旅行会社、島の飲食店、海人、全国の大学生らを巻き込んだものへ発展しました。これも、黒島と離島を結ぶ船会社である安栄観光および石垣島ドリーム観光、黒島の飲食店 あーちゃん・ハートランド・ホリエサンド・Iconoma、ウミガメを入手して下さった海人の下地清栄さん、ウミガメを飼育できる水槽とポンプを寄付して下さった岡本州弘さんと嘉乃さんご夫妻、そして、なによりも参加者の皆様の暖かいご支援のお蔭です。ここにお礼申し上げます。

うみがめ勉強会とは、観光客が参加するウミガメ標識放流です。評価された特徴は、1. 沖縄のウミガメ漁「カーミーかけ」によってウミガメを入手することで、消滅の危機にある漁法を継続、2. 黒島と石垣島を結ぶ船会社および島内の飲食店と提携することで、黒島の観光を活性化、3. 全国から研修にくる大学生も手伝うことで、未来の研究者の育成、4. ウミガメ標識放流による、長期的なウミガメの生態解明、5. ウミガメの現状を伝えることによる、環境保全への啓発活動、の 5 つを持続的なサイクルで結び付けたことです。現在は年末年始、春休み、5 月の大型連休、夏休みに毎日実施し、毎年の参加者は 1,000 名以上になっています。開催の案内は黒島研究所のホームページをご覧ください。

受賞式典は都内で行われ、勉強会に参加した東京海洋大学と琉球大学の学生らも出席しました。また、今年度は宮崎野生動物研究会の中村豊さんもカンムリウミスズメの生態・保護活動で受賞されました。



式典の様子

亀レースのご報告と紀宝町ウミガメ総選挙のお知らせ

紀宝町ウミガメ公園 岡崎 鮎美

紀宝町ウミガメ公園では、大爆走！？紀宝町カメレース 2017 を行いました。本館で展示しているアカミガメ（通称ミドリガメ）は外来種で在来の水草やレンコンを食べます。元々は悪いのはカメを自然に逃がした人間のはずなのに、見学者はミドリガメを見て、悪い亀だ！と言うことが多く悲しい思いをしていました。そこで、素早い動きやよく見ると可愛い顔を近くで見てもらい、イメージを変えられないかという気持ちから、ミドリガメたちを主役にしたイベントを企画しました。9月から11月の土・日・祝日に開催し、多い時には30名以上が走る亀に声援を送ってくれました。レースに参加したのはウミガメ公園で飼育展示している淡水ガメの中から代表してミドリガメ6頭、イシガメ3頭です。全員を見分けてもらうために背番号をつけました。ですが！さすが亀。なかなか思うようには走ってくれず、ゴール直前でUターンしたり、他の亀の上によじ登り、走る事をさぼろうとしたり。進行するこちら側の事などお構いなしの様子に、ゴールするまでひたすらヒヤヒヤさせられた2ヵ月でした。1レース毎に違ったレース展開をみせる亀の歩みと応援しているカメが1位になってほしいお客さん達の声援のおかげで、とても賑やかなイベントとなりました。レース後には、「なんでゴールの前で止まったの！！」や「頑張ったね～ありがとう」と声をかけてもらえるカメもいました。ウミガメ公園という名前からウミガメばかりが注目されがちですが、淡水ガメたちにもスポットライトが当たったようで嬉しく思います。



今回は、年末年始に紀宝町うみがめ総選挙を計画しています。ウミガメ公園にいるウミガメ達の中で人気 NO.1 を決めるイベントです。選挙に立候補しているのは、アカウミガメのいっくんとちび助、アオウミガメのかめじろう、みえちゃん。タイマイのたいこちゃんです。投票したウミガメが1位になった場合は、投票券がウミガメのエサの引き換え券となり、推し亀とのエサやり会ができます！出亀たちは12月23日から毎日1頭ずつ、ウミガメ協議会のツイッターで演説をします（通訳募集中）。投票期間は、12月23日～1月8日の間です。紀宝町のナンバーワンは誰なのか、会員の皆様からのツイッターによる投票も出来るので是非ご参加ください。



優勝候補のいっくん（22歳・男の娘）

カメラに写りたがりの目立ちたボーイ

黒島研究所での学芸員実習を終えて

三重大学生物資源学部 平井 航大

私の名前は「航大」です。大いなる航海のような人生を送ってほしいとの意が込められた名前らしいですが、母親の反対がなければ「海太郎」になるはずでした。というのも、私の父親は海が大好きで、子供の名前に「海」という文字を入れたかったらしいです。そんな父親の下で、私は幼い頃から海の素晴らしさを聞かされながら育ってきました。その話の中でよく出てきた美しい島があります。それが黒島です。

父の影響もあり、海と生き物が好きになった私は、それらについて学べる三重大学に進学しました。ウミガメサークルにも入って、浜歩きや漂着個体調査に励んでいましたが、出会うのはウミガメの死体ばかり。もっと生きたウミガメと触れ合いたいと思っていると、先輩から黒島研修を勧められました。幼い私を形作り、進路にも影響を及ぼした黒島に行けるのですから、「行く」という選択肢以外は考えられませんでした。黒島研究所に到着すると、そこにはウミガメの楽園がありました。楽園に住み込んで働くなんて、考えただけでワクワクしました。しかし、理想と現実とは少し違って、研修中にやった仕事の多くは穴掘りでした。ウミガメと触れ合う機会もありましたが、40kg以上の暴れるウミガメ達を運んで計測するのはかなりの重労働で、危うくカメが嫌いになるどころでした。毎日が肉体労働の黒島研修に適應することができず、最初の1週間は「大変な所に来てしまった・・・。」と嘆いたこともあります。

ところが、1週間もするとそんな生活にも慣れて、異常に楽しくなってきました。ひたすら穴を掘っていたら水路ができてしまったのですが、そこをサメが泳いでくれました。サメが僕の仕事を認めてくれたように感じて、非常に嬉しかったです。黒島の方々は温かくて面白く、研究所の職員は厳しく、研修生は愉快的な人ばかりで、そんな人たちと一緒に過ごした日々は忘れられない宝物となりました。

楽しい日々が忘れられず、その後何度か黒島研修にきました。来る度に新しい発見があり、もっと黒島で働いて多くのことを知りたいという思いが強くなるばかりでした。気づけば学芸員実習や卒業研究までも黒島で行っていました。酪農学園大学の先生方からウミガメの採血を習ったり、島の伝統行事であるアンガマに参加させてもらったり、修学旅行や団体で来所したお客様に展示解説を行うなど、他の施設では体験できない幅広い仕事をさせて頂きました。特に、黒島研究所はお客様との距離が近いことが印象的でした。解説や仕事の合間に、幼い子どもから熟練の旅行者まで、多くの人とお話をすることができました。僕と同じような黒島リピーターもたくさんいて、話が盛り上がりました。常連さんと話す中で気になったことがあります。黒島の海は30年前に比べるとかなり荒れていると、年配の黒島リピーターは口を揃えて仰いました。私から見れば、今でも十分に美しい海ですが、それほど自然が破壊されているのかと悲しい気持ちになりました。研究や解説を通して、この現状を少しでも良い方向に向かわせたいと感じました。多くの経験を積ませて頂く過程で、研究所の方々には多大なるご迷惑をおかけしました。決して見捨てることなく指導して下さった厳しくも優しい職員方には感謝の言葉もありません。



澎湖諸島のウミガメ会議

黒島研究所 亀田 和成

10月11～13日、台湾の澎湖（ほうこ）諸島で開催された The international turtle's conservation workshop in Penghu に参加してきました。この会議は、台湾の高雄師範大学の Lo Liu-chih 博士がまとめ役で、西部太平洋域におけるウミガメの現状を共有し、保全について議論をすることが目的です。台湾の馬公に、台湾、ハワイ、中国、日本の研究者や行政関係者、台湾の大学生たち約50名が集まり、8題の発表がありました。

まず、ハワイのジョージバラーズさんと、マークライスさんからハワイのアオウミガメの保全について報告がありました。手厚い保護によって順調に回復しているそうです。近年は、学生がウミガメ調査に参加できるプログラムを行っていて、カメの捕獲調査に参加する学生らの様子が紹介されました。一見すると、私たちの黒島研究所や多くの NPO が実施していることと同じように見えますが、日本では学生たち個人の意思&自腹で参加しているのに対して、ハワイでは行政が学生にバックアップしているという話でした。黒島研究所でも、サークルの慣例として参加した学生の中から、故郷を見つけたかのように通い始める学生が現れます。元々やる気のある学生だけでなく、大学に入ったものの目標が決まっていない学生を参加させるプログラムは、今後は日本でも重要になってくるかもしれません。

次に台湾からの発表です。台湾の産卵地として有名なのは蘭嶼島で、年に30～50回ほどのアオウミガメの産卵があります。この会議の開催地の澎湖諸島でも10数回ほど産卵があるそうです。そこで、産卵巣のモニタリングとふ化率を調査しているという発表でした。沖縄なら八重山諸島でも、沖縄島でも、座間味諸島でも100回以上の産卵があるのに、ずいぶん少ないと感じました。一方で、ウミガメの規制にはとても厳しく、ウミガメの卵はもとより、漁業で捕獲されたものも全て採取禁止です。そして、毎年何名も逮捕されているとか。最近も、スクーターにカメを載せて走っていた人を逮捕したそうです。産卵が少ないのは、まだこっそり食べられているからでしょうか。その他には、日本では珍しいヒメウミガメがけっこう見つかるという話がありました。また、台湾ではアオウミガメしか産卵しませんが、八重山ではアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの3種がみられます。八重山からは見れば、沖縄本島よりも近い台湾ですが、産卵の数も住んでいるウミガメ達もだいぶ違うようです。

会議の後は、澎湖諸島で最大のウミガメ産卵地である望安島へ移動しました。島につくと早速ウミガメの産卵地である砂浜を見学しました。星砂から出来た砂はとても柔らかく、素晴らしい浜でした。陸地側も植物に囲まれていて、夏場は海鳥たちの巣も多いそうです。その後は望安にあるうみがめ保育センターを見学しました。予定では、もう数日間現場の視察をする予定でしたが、台風による時化のため中止となりました。急きょフリータイムになったので、スクーターを借りて、澎湖生活博物館、海洋資源博物館、化石館、図書館と博物館巡りしてきました。台湾は博物館ラッシュのようで、望安のうみがめセンターも含めて、どの建物も新しくとても立派です・・・でも・・・、なぜか展示物はすべてレプリカです。伝統的な生活様式に使う品々も、大水槽の中を泳いでいるマグロやウミガメ、エビたちもすべてレプリカです。これは展示の維持にかかる費用を抑えた結果なのか、それとも進み過ぎた動物愛護の影響なのか。見た目は本物そっくりなレプリカたち、それを水槽越しに眺める観光客たち、言葉では上手く伝えられない違和感を残す出張となりました。



会議の様子

左から、亀田、
通訳の Chien-Cheng 博士、
まとめ役の Lo Liu-Chih 博士、
質問に答える Tien-Hsi Chen 博士

望安島のウミガメ産卵地
美しい砂浜である
驚いたことに漂着ゴミがない。



馬公の海洋資源博物館の展示
一見すると大水槽
しかし、中はすべてレプリカ



STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金:なし
 年会費:個人会員3,000円、団体会員10,000円
 特別会員100,000円
 会員特典:オリジナル会員証&グッズ、機関誌



ご寄付を頂いた方々

玉岡 昇治、シャディ(株)、ヤフー(株)、斎藤 充、串本海中センター、鈴木 里美、吉田 麻美子、池村 茂、四国コカコーラボトリング(道の駅日和佐・かめたろう)、白崎 英文、一般財団法人H2O サンタ、半井 富子、奥田 恭子、坂東 武治、南知多ビーチランド、江口 英作、国民宿舎紀州路みなべ、ライオン株式会社。(敬称略、寄付を頂いた日付順)

そして、みなべ基地、黒島研究所、室戸基地へのご寄附&差し入れを頂いた方々。



編集後記

元会長の亀崎さんの紹介で、久しぶりの海外出張をしてきました。場所は、台湾の澎湖諸島。会議の合間に公設市場に行って、念願のサバヒー粥を食べてきました。このサバヒーはボラとアジを足したような魚で、世界的には養殖が盛んな大衆魚です。日本にも生息していますが食べません。それは小骨が多いから。期待通り、澎湖の公設市場ではサバヒーは、カンパチやテラピアと並んで普通に売っています。裏路地でお客の多そうな店を選んで注文してみました。どうやって小骨を処理するのかと聞いていたら、なんと小骨のない腹身しか入っていない。後で、Liu-Chih先生に聞いたら、小さいのは丸ごと、大きいのは腹身だけしか粥に使わない、でも背身はすり身にすると美味しいぞ、と教えて頂きました。そういえば、和歌山や高知で有名なウツボ料理も肛門から尾は骨だらけなので、切り取って食べます。教えられてみれば同じやり方でした。このサバヒー、黒島にもたくさんいるで黒島でも料理法を広めたいと思います。

黒島研究所:亀田 和成



マリンタートラ(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2017年 12月 25日
 発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
 電話:072-864-0335 Fax:072-864-0535
 URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org